

企画趣意

フォーラム実行委員会委員長
平 沢 信 康
伝統武道・スポーツ文化系 主任

本フォーラムは、文部科学省から運営費交付金を獲得した平成 21 年度教育改革事業「修養的教養に主眼を置いた学士課程教育の再構築—武道教育における礼法指導を中心に」の主要企画として実施するものです。

本学では、この事業の一環として、昨年 12 月に国際武道シンポジウムを開催し、おかげさまで成功裏に終えることができました。今年度のフォーラムは、その続編とも言える企画です。

21 世紀に入り、我が国の教育政策には、伝統回帰的な思潮が強まりました。

教育基本法の改正をめぐる論議のなかでも、「教育の目標」に「伝統文化を尊重する」との表現を盛り込むべきことが強く要求され、2006 年 12 月 15 日に改正された新しい教育基本法では、第二条に「伝統と文化を尊重」が明記されました。

翌 2007 年 1 月に発表された「教育再生会議」第 1 次報告「社会総がかりで教育再生を」において示された 7 つの提言の中にも、同様の志向が含まれています。同報告の「教育内容の改革」の中の「3 すべての子どもに規範を教え、社会人としての基本を徹底する」には【体験活動の充実】が掲げられておりますが、そこには「子供たちに（中略）茶道・華道・書道・武道などを通じ、徳目や礼儀作法、形式美、様式美を身に付けさせる」ことが例示されています。さらに、経済財政改革の基本方針 2007 においても、その第 4 章第 6 節「多様なライフスタイルを支える環境整備」に列举されている具体的手段のなかに、「改正教育基本法の目指すところに従い、我が国の文化力の向上、伝統の継承に必要な措置を講ずる。」と明記されました。

それより 5 年ほど前の 2002 年 2 月 21 日に発表された中央教育審議会の答申「新しい時代における教養教育の在り方について」は、「教養教育」概念をかつてないほど広義かつ多岐的に把握し、かつ従来は知的な側面のみで捉えられてきた「教養」を「規範意識と倫理性、感性と美意識、主体的に行動する力、バランス感覚、体力や精神力などを含めた総体的な概念としてとらえるべきものである」との提言を行っています。その第 2 章「新しい時代に求められる教養とは何か」の（5）では「礼儀・作法をはじめとして型から入ることによって、身体感覚として身に付けられる『修養的教養』は重要な意義を持っている」と謳いあげています。

この答申は、おそらく戦後日本の教育政策文書で初めて「修養的教養」なる名辞を提示したものとして、歴史的に注目に値する提言であると思われますが、「修養的教養」に着眼したかたちでの大学における教育改革の取り組みは、武道教育に関しても、あるいは教養教育としても、寡聞にして聞かれません。

私どもは、この言葉に着眼して、大学教育における可能性と課題を探ろうと考え、本企画に至りました。

修養的な世界について、歴史上の武芸者や武道家に想いをめぐらしますと、例えば宮本武蔵の書画が容易に想起されましょう。有名な「枯木鳴鶴図」などはスピリチュアルな迫力に満ちています。近代の剣道界では、鹿島神傳直心影流第十五代の山田次朗吉の楷書など、気迫に富み格調高い作品が見られます。山田は明治・大正期の代表的な剣道家で、東京帝国大学や一橋大学の前身校で教えた剣道家です。

道（路）は、我々が、ある目的地へ向けて歩み（もしくは走り）ゆく物理空間であり、目に見える場です。ところで、〈道の思想〉としての、「道」は、道路と同様に、目的へ向かう、道行きとしての方向性を内包してはいるものの、肉眼にて見えるものではありません。それは不可視です。奥義ないし真髄として、はるか彼方に、かすかに察することができ、あるいは憧憬の対象として想像することができるものに向けて精進する行為であると言えます。神髄は、容易に触知実感できる類のものではありません。「聖諦・修



証あるにあらず。不得不知なり」(道元『正法眼蔵』第二十六仏向上事)と言われるゆえんです。

あくまで全身心をフル活動させながら試行錯誤しつつ長年歩み進めるなかで、自ら覚知するほかない世界であります。神道や儒教あるいはキリスト教といった思想や信仰に基づいた修養を考える方もおられるでしょう。仏教には「仏道」といった呼称があり、独自の修養の世界があります。仏道であれ、武道や芸道であれ、究極境へ至りゆく求道的な探求という点において異なることはありません。それが〈道〉の世界である所以であるといえましょう。

ところで、我が国の武道や茶道といった「道」の世界は、言うまでもなく日本の「伝統文化」ですが、周知のように、現代では国際化しております。

第二次世界大戦後、1951年7月にヨーロッパ柔道連盟主導で発足した国際柔道連盟には、今や199の国と地域が加盟しており、国連加盟国数192を凌駕するに至っています。なかにはフランスのように、柔道愛好者が日本の約3倍もの数に達した国もあるほどです。国際剣道連盟にも47の加盟国・地域があり、世界の空手人口は5千万人とも言われます。今日、「カワイイ」「オタク」といった若者言葉や Kuroshio, Baiu, Tsunami, Karaoke と同様、Budo もまた英語として国際的に通用します。

英国の高等教育機関においては、柔道への関心は早く、20世紀前半にオックスフォード大学やケンブリッジ大学に柔道クラブが創設されています(前者の柔道クラブは1926年、後者のトリニティカレッジの柔術クラブは1906年創設)。さらに今日では、大学進学予備門的なエリート中等教育機関であるイートン校(1440年創設)など、歴史の古い名門パブリックスクールにも柔道場が設けられています。「英国紳士の製造所」(トレバー・レゲット『紳士道と武士道』)と称される伝統校に、課外活動であれ、柔道が受容されていることは注目に値します。

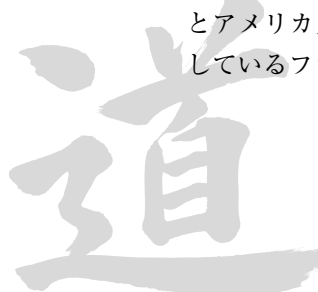
日本庭園についてはカナダのブリティッシュ・コロンビア大学にある新渡戸記念庭園など、幾カ所に立派な庭園と茶室が設けられております。ホノルルの日本文化センターなどにも茶室が設けられています。ハワイ大学には日本文化史を研究教育する千宗室十五世寄付講座があり、Paul Varley 教授のあとを継いだ William Wayne Farris 特任教授が日本文化史として茶道史を教えておられます。同大学には日本庭園と茶室が設けられており、茶道の実技授業も開設されています。ハーヴァード大学には、裏千家の茶道家が指導している茶道クラブがあります。今秋、その部長をしている学生と面談しましたが、泉鏡花を研究する文学青年である彼は、一年生の時には剣道部と兼部していたそうです。中国では、私立大学・浙江樹人大学に茶文化学科があり、客員教授の丹下名月女史(国際茶道・香道丹月流家元)が指導した学生は二千人を超えたそうです。

第二次世界大戦後、民主主義やジャズやロックなどのアメリカンカルチャーという米国のソフトパワーが日本の戦後復興の在り方や若者の思潮に大きな影響力を有しました。今や、日本の文化的ソフトパワーが、外国の社会に浸透しつつあります。主に美術やデザイン、漫画やアニメ、ファッション、建築、文学などですが、武道や芸道もまた日本と諸外国との間の絆を強めることに寄与しています。

漫画やアニメほどの大衆的な普及度はないにせよ、武道や茶道は、いわゆる「ジャパニクル」現象の一翼を担っていると言えます。これらの分野について、単に内向きに歴史的なノスタルジーに浸るのではなく、未来志向で、かつ国際的視点を入れながら再考してはいかがでしょうか。

このように武道や芸道が国際化するなかで、武道、ことに柔道のスポーツ化が進行していることは周知の事実ですが、その一方で、武道本来の精神へ立ちかえろうとする気運や憧憬が国内外で認められます。外国人のインテリ武道家のなかには、日本武道の精神性に魅力を感じ、「伝統文化」としての武道に関心を寄せる人々が徐々に増えているようです。彼らのなかには、日本語を解し、漢字を愛好し、あるいは書に親しむ方さえいます。

海外の武道家のなかには、武道のもつ道德教育的な側面に注目する人が増えつつあるようです。20世紀初頭よりイギリスのエリート階級に柔道が普及したのも、柔道の有する修養の性格が認められたため、とアメリカ人武道研究者 Geoffrey Wingard によって指摘されています。徳目を列挙したポスターを作成しているフランス柔道連盟の近年の啓蒙的な取組みにも、それが明瞭に窺えます。フランス柔道連盟本部



の1階ロビー売店には「心技体」と漢字で書かれたタオルが販売されています。仏日スポーツ文化協会 ACS のホームページは、「礼儀」を筆頭に諸徳目を漢字で大きく表記して教育指導上の方針を解説しています。

昨年12月、国際武道シンポの際に、パネリストとして招聘したマイク・カラン博士（国際柔道研究者協会会長）から教えられたことですが、「英国柔道の父」と仰がれる小泉軍治（茨城県稲敷郡高田村出身、明治18年7月8日生まれ）は、柔道を武道芸術と認識し、さらに活花を英国人門下生に推奨していたそうです。1918年に「ロンドン武道会」を創設した彼は、柔道を指導する傍ら、漆器も作製しました（ロンドンにあるヴィクトリア&アルバート美術館には彼の幾つかの作品が展示されている）。英国の高名な柔道家でBBC日本部長を務め、禅の宗匠でもあった Trevor Leggett 氏も小泉の門下生でした。

ドイツ南部にある小都市ケーニヒスブルンの「心」柔道クラブでは、道場の入り口に、三船十段の揮毫になる「精進」と書かれた額を掲げています。

フランスで、かつて藤田嗣治画伯が受賞した有名なレジオン・ドヌール勲章を授与された栗津正蔵九段（パリ在住）は、フランス人柔道修行者への研修において、漢文の暗唱・音読を促しておられるようです。古典が人間の修養にもたらす効果を考えてのことのようです。栗津先生の御自宅で伺った話の中で、印象深かったのは、先生の口から漢詩や佐藤一斎の語録が飛び出したことです。佐藤一斎は江戸後期の高名な儒学者で、西郷や大久保たちにも影響のあった知識人です。『言志四録』からの言葉であったと思いますが、まさに「修養的教養」を身につけておられる柔道家です。

我が国の精神修養の世界には、例えば、坐禅や静坐・正坐あるいは黙想、写経、滝に打たれての修行などの方法があります。礼法も、その一つの方法であり、同時に、その表現世界です。

歴史を遡りますと、古代中国の指導層にとって必須とされた「六芸」と称される学芸のなかにも、また儒教の主要な教養4領域にも、「礼」が含まれています。我が国では室町期に小笠原礼法が定められ、近世の武家礼法となりました。東アジアでは、礼は、古くから存在する教養理想でした。

しかしながら、近年の日本では、社会全体に漂う目的喪失感や閉塞感の中で、モラルやマナーも身につかないまま多くの青少年が成長しゆく現状が、教育関係者等から懸念されています。「型崩れ」の世相の下、コミュニケーション能力が若者の間で衰えつつある、とも指摘されています。かかる社会的思想史的文脈を意識しつつ、このたびのフォーラムでは、「礼に始まり、礼に終る」をモットーとする武道における倫理性ないし精神性を再考するため、「武道礼法を中心に」とサブテーマに掲げた次第です。

昨年9月、イギリス、フランス、ドイツの幾つもの柔道場を視察し、武道礼法が海外、とくにフランスにおいて行き渡っている実態を目の当たりにしました。ことに、ボルドーにあるミチガミ道場には、指導されておられた道上伯氏の遺徳を偲ぶかのように古風な精神性が息づいています。

イギリスのバース大学には、英国柔道史に関する一次史料を収蔵した「リチャード・ボーエン・コレクション」があります。その資料の中で、1940年代の柔道試合の白黒写真を見せてもらいました。その中には、元外交官であったトレバー・レゲット氏が、蝶ネクタイでステッキをつきながら審判を務めている写真がありました。このころの英国柔道には未だ階級制度の影響が色濃いためか、礼式尊重の態度が垣間見られます。

伝統的な倫理観と審美観を再評価する機運があるなか、高等教育における武道や芸道の教育の意義を改めて問い直してみても良いのではないのでしょうか？

近年、大学の教養教育として武道を捉える考え方さえも、西洋の知識人に見られます。参考までに紹介しますと、シカゴ大学の社会学者で学部長も務められた Donald N. Levine 名誉教授は、「リベラルアーツと武道」と題した論文を執筆し、アメリカ大学協会の『リベラル・エデュケーション』誌に1984年に掲載しています。同氏は22年前、学部長の時に、シカゴ大学の正規のカリキュラムの中に、紛争処理をめぐる社会学理論と合気道を併せ講ずる授業を開講することを断行しました。半分はレクチャーで、半分は実技だそうです。この試行に刺激と示唆を受けて、柔道の授業を開講したのがトロント大学の David Waterhouse 名誉教授で、1990年代から開始し、やはり半分は実技でした。さらに現代では、カナダのア





ルバータ州にある Lethbridge 大学のように、柔道を正規のカリキュラムで教えている大学も現れているようです。ハワイ大学にも「柔道入門」という授業があるそうです（日本研究センター長の言）。今や、国際的な視野の下で、大学における武道の教養教育のあり方を考えるべき時代に入ったと認識するべきなのかもしれません。

本学では、中期目標の本文において「幅広い教養と品格ある豊かな人間性を備え」た人材養成を明示しておりますが、大学の教養教育の中に、修養的な伝統的価値世界は、どのように位置づけるのか、とりわけ体育大学において、いかに活かすのか、困難な課題ですが、様々な観点から検討してみたいと思います。

礼法への教育的関心については、日本近代教育史のなかで、2度ほど高揚期があったと思われます。明治前期と太平洋戦争の開戦前後が、それです。最近ふたたび再評価の機運が徐々に高まりつつあるようです。サブタイトルに「礼法再考」と掲げた今年の国際武道シンポジウムが大盛況であったことなども、時代精神を映しているように思われます。

午前中に行う基調講演の講師として、鎌倉時代からの長い伝統と歴史を誇る小笠原流弓馬術礼法の御宗家をお招きすることができました。光栄にも、三十一世宗家の小笠原清忠先生には、今年度から本学の客員教授に就任いただいております。

午前中のフォーラムⅠでは、本学の教員（非常勤講師を含む）が、今回のテーマに関して、どのような教育実践に取り組んでいるか、紹介を兼ねながら発表します。広い意味でFD活動の一環として企画しました。

午後のフォーラムⅡでは、各界から、著名な方々をお招きました。

今や、海外の高等教育機関においても、柔道や茶道を正規の教育課程で教える大学が現れています。そうした外国人の視点を確保するため、今回は、茶道家であるとともに武道家でもある研究者を米国の大学から招聘しました。30年余におよぶ裏千家茶道と少林寺拳法の修行体験を披瀝しつつ、アメリカにおける武道礼法および茶道礼法の普及度や関心度など、異文化社会における受容の現状について語ってもらう予定です。

幸いなことに、本学では、教職員に対してはもちろん、学外者に対しても挨拶できる学生諸君が少なくなく、概して好評を得ています。この慣行は第1期生が創始した伝統と伝えられていますが、近年では、武道課程の学生諸君を中心に、さらにいっそう礼儀正しい御辞儀をする学生が散見されるようになりました。

本フォーラムは、武道礼法を中心とした企画ではありますが、開催の狙いとしては更に広くカバーしたいと念願しています。すなわち、日頃の受講時のマナーを初め、学校・高齢者施設・フィットネスクラブや企業などでの学外実習において求められるマナー、さらには就職活動時に活かすべきマナーの教育のありかたについて、道徳臭に陥ることなく実効ある取り組みがいかにして可能なのか、一緒に考えたいと希望します。

教職に必要な資質としても、「豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力など」（文部科学省のHP）が求められています。教職を初め対人援助専門職やサービス業に就こうとしている学生諸君に資する内容となることを期待しています。

昨今の政治や思想界あるいは美術界で、「前衛」は死語になったと言われます。世はおしなべて洗練の度を加えつつも、閉塞感が漂っていると、しばしば指摘されます。現代の日本では、容易に突破すべき対象が見えず、ややもすれば倦怠感が瀰漫しやすい精神状況になっているといえましょう。それを打破する一つの可能性は、伝統に根ざしたスピリチュアリティなのかもしれません。

本学の学生と教職員にとって、さらに広く我が国の高等教育関係者にとって、このフォーラムが、礼法という伝統的な形式美・様式美に対する再発見の機会、再評価の契機となり、同時に学生諸君の資質向上へつながる成果が上がることを祈念しています。